第6回　天の召しにあずかっている聖なる兄弟

第3章1節から６節　　イエスはモーセにまさる

1 だから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち、
　わたしたちが公に言い表している使者であり、
　大祭司であるイエスのことを考えなさい。
2 モーセが神の家全体の中で忠実であったように、
　イエスは、御自身を立てた方に忠実であられました。
3 家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように、
　イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。
4 どんな家でもだれかが造るわけです。万物を造られたのは神なのです。
5 さて、モーセは将来語られるはずのことを証しするために、
　仕える者として神の家全体の中で忠実でしたが、
6 キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。
　もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば、わたしたちこそ神の家なのです。

それでは、今日は３章の1節から6節を中心に、皆さんとご一緒に御言葉に聴いてゆきたいと思います。

第1節、
だから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち、私たちが公に言い表している使者であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。

「天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち」という呼びかけがなされています。この「兄弟」は、アデルフォスというギリシャ語が使われていますが、ヘブライ語における「兄弟」はアーヒーフという言葉で、ユダヤ人にとっては、とても重い響きをもった言葉なのです。元来アーヒーフは「同胞」という意味ですが、イスラエル人たちにとってはこの「同抱」という言葉が特別な意味で受け留められていたのです。

＜旧約時代のイスラエル人たちにおける兄弟の概念＞
それは第一に、この「同胞」が「イスラエル共同体に属している者」という基本理念の中で使われていた言葉だということです。
そして、この「イスラエル共同体」という一つの群れは、「出エジプトという出来事を通して、イスラエルの抑圧者であったエジプトに神が課された犠牲を通して、神に贖い取られた民族なのだ、そして今や、神が所有してくださる家族なのだ」という意識を強くもっているのです。。

従って、その共同体に属する各々のメンバーは血のつながりに等しいほどの結束を持っていたのです。この家族の結束は、その絆のために血と汗を流した人を思い起こすことによって、強化されると言われています。先祖を思うというのはそういうことではないかと

思います。同じような意味で「イスラエル共同体」にとっても、自分たちのために血と汗を流した人を想起することは、非常に大切なことであり、そのことによって共同体の絆がいよいよ強化されていったのです。　（今もこの考え方は継続していると思われる。）

例えば、年に一度守られている「過越の祭」は、出エジプトの出来事を記念したもので、１）エジプトでの奴隷生活の苦しみや悲しみ、２）鴨居に血を塗ったイスラエル人の家を避けて、エジプト中の初子が犠牲として神に取り上げられたゆえに、イスラエルが自由の身を獲得できた、そうした神の護りと恵み、更には、３）四十年間の荒野での試みと、乳と蜜が流れる地カナンへの帰着、ということを「想起するとき」として捉えられていたのです。

そうした出来事を記念して、自分たちの先祖に心を向け、また自分たちは「それ故に一つなのだということを考えている群れ」という意味で使われています。ですが、ヘブライ人の「兄弟：アーヒーフ」という言葉を、私たちが、いわゆる軽い意味での「同胞とか仲間たち」と捉えてしまうと、ここで描かれている『兄弟』という**言葉の**真意が、私たちには全く届かなくなってしまうのです。

ところが一方で、その「兄弟」という言葉を重視しすぎますと、今度は、自分たちが選民であるという意識をより鮮明化させる効果によって、神の御心からはみ出してしまう危険性を孕（はら）むのです。つまり、「異邦人」という言葉や、「罪人」という言葉を使って、イスラエル民族以外の者を厳しく峻別していくことにより、自分たちは兄弟であるという意識を殊更強固にしていった、という観点もイスラエル民族の中にはあったのです。よって、彼らにとっては、あの出エジプトで起こった神の救いの御業、解放の出来事こそが、彼らが今、神と共に在るという自意識への原体験になっているのだと思います。

（神の救いに関する真理を自分たちユダヤ人が独占していると考える排他性をパウロは批判した。パウロを正しく理解するためには、彼の議論と当時のユダヤ教の文脈に位置づける必要がある。ーー信徒の友2021年11月号p18「新約聖書はユダヤ教をどう捉ええているか」中野 実/東京神学大学教授ーーより引用）

「神はこのようにして我らイスラエルの歴史に介入なさり、自分たちを特別に救ってくださった。そして、そういう神との関わりなしには自分たちの『今』は存在しない」という認識で、彼らは贖われた者同士の共同意識とか、連帯意識といったものでしっかりと結び合わせ、お互いを「兄弟」と呼び合うのです。そういう「神の贖い」がその中にきちんと位置づけられて、呼び交わされていました。この手紙は、そういうイスラエル人、ユダヤ人、ヘブライ人に向かって書かれた手紙ですから、ここで「兄弟」という言葉を使っているのは、正にそういう特別な重みをもっ**た言葉とし**て使われているのだ、ということを覚えておいて頂きたいと思います。

（松山先生は、一つの言葉「兄弟」にも、歴史的背景を詳細に説明してくださっています。）

特に「兄弟たち」という言葉が何度も何度も出て来ますが、そこに、いつも私たちはきちっと焦点を合わせて見る必要があるのです。それは同時に、１）「その兄弟意識が、あなたがたの傲慢の罪の根源でもあるのだ」ということを、著者は訴えかけています。

更に著者は、２）「偏狭な兄弟意識が打ち壊されて、新たに**拡張**された兄弟意識というものを再構築することが大切である」と読者に訴え、変革を提唱し続けています。つまり、この「兄弟」には、傲慢の自覚と、偏狭の改革という、二つの主張があるのです。

（鋭い指摘です。熱心が排他性を生み出すことを、私たちは今まさに経験しています。）

彼らヘブライ人は特別に選ばれた神の民であることを誇りとし、そのことが、彼らをして背筋をそらせて「兄弟」と互いを呼ばしめているものなのですが、そのこと自体は間違っていません。けれども反面、それが彼らを「傲慢、偏狭」の頑なな民としてしまっているとすれば、ヘブライ人をあくまでも奴隷としてエジプトに縛りつけようとしたあのエジプト王ファラオと、なんら変わりがないのではないでしょうか。

神があなたがたを解き放たれ、自由な者としてくださったのならば、あなたがたはその自由をもって、もっと多くの人々と心を通わせ、神の愛の中に生きる共同体として、自分たちを位置づけていくべきではないでしょうか。
私たちはこれを記した人の切実なる訴えを、この「兄弟たち」という言葉から読み取っていく時、その言葉を聴く度に、その背後にある意識に心を向けていくことが、とても大切になっていくのです。（まさに今こそ必要な訴えです）

因みに「申命記」という書物は、偏狭な民族意識に対して、割合緩やかな神の贖いが世界に及ぶのだ、という考え方をもった書物なのですが、そこでも 「兄弟」という言葉はユダヤ人たちに限定して使われているのです。それゆえ、神が「愛を示しなさい」と告げられる他国からの寄留者たちに対しても、「あなたがたは彼らに親切にしなければいけません」と告げられる一方で、その寄留者たちは、決して彼らにとっての「兄弟」とは扱われないのです。

このことを、もう少し視野を広げてみれば、他のグループに属している、例えば律法に生きることのできないでいる人々に、「兄弟」という言葉を彼らは徹底して使わないのです。彼らは愛の対象、即ち、心を向けなければならない対象ではあるけれども、自分たちの真の仲間ではない。「兄弟ではない」というすごく頑強な壁が、申命記の中にも確立していたのです。

＜新約時代の教会における兄弟姉妹の概念＞
ところが、イエスの御教えによる新約時代に入り、本質的に、そういう、いわゆる民族性というアイデンティティーの壁が突き破られていきます。そしてキリストを信じるメンバーであれば、誰もが「兄弟」なのだという新たな共同体形成の発想が生じてきたのです。
その中では、パウロ流に言えば「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男性も女性もない」、そういう一切の壁が取り払われて、神が愛されているという、神様の側の一方的な行為によって、「兄弟」というものは作り上げられている、共同体は生まれて来ているのだ、というような考え方が提示されているのです。

そういう広い視野に立って「兄弟」という言葉を使っていく。そういう使い方によって、新約聖書の中には174回も「兄弟、兄弟、兄弟」という言葉が出て来ているのです。
こうして、新しい「広義の兄弟」という意味と、ユダヤ人たちが持ち続けてきた「極めて狭義の兄弟」という意味との間に立ちはだかっていた大きな壁が、「御子イエス・キリストの贖いという計り知れぬ御業」により、初めて突き崩されていったのです。

＜現実的な破壊としての事例＞
大分以前のことですが、1989年に東西ベルリンの壁が突き崩されたという歴史的な事件がありました。その瞬間まで、彼らは壁の西側でも東側でも同じように、「我らこそ真のドイツ民族なのだ」と言い張っていたのです。両者には、東の奴とは違う、西の奴とは違う、という偏狭意識が確かにあったのです。

つまり、東の人々に対して「自分たちと違う」と西の人々は見做していましたし、東の人々は彼らを見て「彼らはもう西欧文化にまみれてしまって、純粋な信仰を持っていない」と見做していました。そして其々に神を信じ祈って、東西をいつか一つにしてくださる、ということは相互に信じ合いながらも、壁を挟んで「どうか、彼らのあの頑なさを打ち砕いてください」とか「あの堕落した姿から救ってやってください」とか、自己の立場や都合において、てんでに祈っていたわけです。
それが、壁が突き崩されることによって、「そうではなかった」ということがお互いに分かって来た、そうした出来事が生じたのです。
（このように歴史意識を読み取ることを教えてくださっています。凄い勇気だと思います。）

正に、今日の教会に属する私たちが、自分たちで造り上げた教会外との『壁』を持ったまま、互いに「兄弟姉妹」という言葉を、かつてユダヤ人たちが自分たちを「兄弟」と呼びあっていたと同じような感覚で、使っているのではなかろうか、と思います。

＜この手紙の著者が強調する兄弟＞
ここまで、だいぶ「兄弟」という言葉にこだわってきましたが、そうした意味を踏まえれば、両者が「**兄弟たちよ**」という呼びかけていることの中に、「兄弟ならば、積極的に互いの責任を担い合おうではないか」という共生の精神が満ち満ちていると思えるのです。

著者は「あなたがたはユダヤ人であり、かつてはユダヤ教を信じていて、御子イエス・キリストを十字架に磔にしてしまった民である。しかし、そのことはもう問うまい。キリストは今や、主を信じるあなたがたを愛し、あなたがたのためにも命を捨ててくださったのだから、私はあなたがたと兄弟でありたい。キリストこそがあなたがたを私たちの兄弟姉妹として与えてくださったのだから。」という確信を抱いて呼びかけています。

ですから、この手紙の著者は、今までのように民族枠に限界づけられた「兄弟」ではなく、或いは、律法の本質である愛からはみ出て、律法の細則条項を守り切れるかどうかによって見極める「兄弟」という意識でもなく、むしろ、律法の根底（十戒）に流れ続けている『隣人愛』に根ざしています。その観点から、今や神によって支えられている、当時罪

びとと呼ばれていた人々や異邦の人々のためにも、キリストが御命を捨ててくださり、隣人愛の中に捕らえてくださったと信じ、そうしたすべての人々が「共に兄弟である」という、ここでは非常に新しい意味を、「兄弟」という言葉に込めて語っています。
（ロ-マの信徒への手紙13：９-10には「『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。」とあります。）

＜開かれた共同体を目指す、親称の二人称の兄弟姉妹＞
私はここまで、その隣人愛にとことんこだわって、「兄弟」という言葉について盛んに語ってきたわけですが、この言葉はある意味、「この手紙の中で非常に重要な意味と位置を占めている言葉」と捉えているのです。
ですから、「兄弟たち」という言葉を使いながら、独善的な特権意識の中に陥っているユダヤ人に対しては、マタイによる福音書12：18－20においてイエスが、弟子たち或いはユダヤ人たちに向かって「わたしの兄弟、わたしの母とは誰のことか。神のみこころを行う人こそわたしの兄弟姉妹、また母である。」と告げられた宣言を、是非とも提示しなければなりません。

そして「神の救いの恩恵に与る者がすべて兄弟姉妹なのだ、神の御言に生かされている者がすべて兄弟姉妹なのだ、イエスをキリストと信じる一点において結び合わされている人々こそが、真の兄弟であり姉妹なのだ」と。
そのようにして堅固に形成された兄弟姉妹という共同体は、決して各自がその中で自己完成を一生懸命に求めていく「閉じた共同体」とはならず、むしろ自分たち其々が革新させられていくことを願い求め、新たに造り変えられていくことを信じながら、主がすべての人を「兄弟姉妹」とされる可能性を発揮される「開かれた共同体」となる。そして、そうした共同体の中では、ごく自然に呼びかけ合う「きみ、あなた（親称の二人称）」によって、「真の兄弟姉妹」となってゆくのです。

＜この手紙の開き手は、知識が豊かなユダヤ人＞
この手紙は「ヘプライ人への手紙」と書いてあるわけですから、こ**の受け手として想定されている相手（モデル）は、**律法とかユダヤ教の祭儀とか、そういうものに関して非常に高い関心を寄せている人々であったと思われます。

例えば、ユダヤ教の中でもごく限られた人々だけが用いている言葉が沢山出て来ます。この後に出て来る「**大祭司**」という言葉もそのひとつで、通常は「祭司」でいいわけですが、相当学問のある人々のみが問題にしていた言葉であるのです。
そういう意味では使徒パウロも「私はユダヤ人の中のユダヤ人だ」などと告げています。つまり「律法に関して私は殆ど完璧に守って来た、教えも全部知っている」とのお披露目ですから、この手紙の受け手たちも、そういうレベルのユダヤ人だったと思うのです。
ですから、彼らは「当時のローマ帝国では、キリスト教をユダヤ教の一派のナザレ派と捉えていた」ことまでを、よく弁えていたというわけです。

そう捉えると、当時のキリスト教は、ユダヤ教の中では極めてマイノリティグループ（少数派）に属し、しかも一部のユダヤ教の人々からは、「異端視」されるような状況下にあったことが分かります。そんな渦中で、かように優れた人々がイエスと出会って、イエスをキリストとして受け入れ、信仰告白に至ったわけですから、その人々にはどんなに激しい闘いがあったのだろう、そしてどんなに大きな回心の出来事があったのだろうかと、この著者には類推できたのです。
パウロのあのダマスコ途上の回心と同様に、この手紙の受け手もどこかでそういうキリストとのお出会いがあったのでしょう。だからこそ彼らは、イエスをキリストと信じることができたのだと思うのです。しかし迫害の嵐の中で、このキリスト教というマイノリティの信仰をもっている彼らが、もう一度揺すぶられ、「本当にイエスはキリストだったのだろうか？」と考えざるを得ないような厳しい現実の圧力、ユダヤ教からの非難、「イエスをキリストと信じているから、お前たちはそのような目に遭っているのだ」という罵声が集中砲火されている状態にあったのではないかと、著者は容易に想像できたのです。
（信仰を貫くことは、どの時代にあっても戦いで、少数派であることを覚悟して、栄光の主を信頼して導かれることを祈ることが必須と松山先生は常に語り教えられました。私の胸にグサリと刺さる言葉です。）

そういう人に対して著者は、今、励ましを与えようとしてこの手紙を書いているのです。ですから「あなたがたは兄弟となるために、先ず天の召しにあずかっている」と書いているのです。（3章の①節は「**だから**」という接続詞で始まっています。その「**だから**」を丁寧に歴史的な背景を見逃すことなく解説されているように私には思われます。深い読解に心が打たれる思いです。）

＜呼び出された者＞
「天の召しにあずかっている者であり、聖なる者とされている者、そういう人々が私たちの兄弟なのだ。」つまり「私たちの兄弟となるのは、天の召しにあずかり、しかも聖なる者とされているという、二つの大きなハードルをクリアーしている者たちなのだ」と著者は言うのです。　この「召し」という言葉、クレーシスとギリシャ語では言いますが、このクレーシスの派生語カレオーは「召す、呼び出す」という意味をもっています。。

「教会」は正に「召しに与った者の群れ」と言われますから、彼らは自分たちの意志からではなく、“神に呼び出されること”によって、その群れに属したのです。
キリスト者であるということは、「神の一方的な御計画によって招かれ、召され、加えられ、生かされている存在であるのだから、あなた自身の努力や精進があなたをキリスト者に成したのではなく、神があなたを完全にキリスト者であり得るように育み、養ってくださった」と言うのです。

教会ではよく、精進をすることが信仰の上では大切なことのように考えられ、慈善を行なうこと、愛に生きること、何かそのような具体的な目標を掲げたりします。それを一所懸命クリアーしてゆけば、一歩前進でき、一歩クリスチャンとしての完成に近づくのだと。そういう発想が、ユダヤ教を強く批判している教会の中にもあるのです。また、礼拝には皆勤ですとか、教会のご奉仕を熱心にしていますとか、それらを一つ一つクリアーすることにより、自分たちは「立派なクリスチャンになってゆくのだ」という考え方もします。

しかし、それはそうではありません。神は「あなたがたがどんな状態であっても、イエスを救い主キリストと信じ、その十字架の贖いを受け入れるならば、立派にクリスチャンなのですよ」と仰っているのです。また、その救いを受け入れる状態というのは、よく考えて見ますと、むしろ、自分が一番駄目で弱い状態の時なのです。救いなしには立てない状態の時なのです。そういう状態の中で「あなたは私の民、クリスチャンですよ」と主は認めてくださるのです。

そんなクリスチャンが、より主の名に相応しいクリスチャンになるためにはどうしたらよいかと言えば、その主に委ねて育てられ、従い養われて行くしか道がないのです。

＜裁きの日に、キリストは私たちを完成してくださる＞

「裁きの日、終わりの日」という言葉を用いる時、それまでに私たちが『完成』しておれば、裁きの日には神の御前に立って天国に行ける、というような発想をしてしまいがちです。けれども、私はむしろ「この裁きの日にこそ、キリストは私たちを『完成』させてくださるのだろう、私がどんなに弱く破れた存在であったとしても。キリストがおいでくださって、この私を確かに御自分に贖われた者と捉えてくださる時、初めて「完全」になれるのではないだろうか。」というような信仰を、私は確信として抱いているのです。

だから、終わりの日に向けての掛け声「頑張ろう！」（まあ頑張ろうと言ってもいろいろな頑張り方があるわけですが）などと、私はあまり口にしないのです。私は終わりの日に向けて「本当に主の平安の内に日々を楽しみながら、与えられた道を歩んで行こう、讃美と喜びの中で毎日を過ごそう」という緩やかな感じが好きで、何が何でも頑張って何人に伝道しましょうとか、何人を救いましょうとか、あまりそういったノルマ的なことなど考えないのです。だから私は、牧師としてはアウトサイダーなのだと思うのですけれど、少なくとも聖書の信仰に生きていると、そうなるのだろうと思います。（アーメン）
私が自分の力で完成できるのだったら、救い主は要らないのです。できないからこそ、十字架の救い主が必要なのですから。
（闘病中も松山先生は溌剌として讃美され、かくしゃくとして説教をされた。病を歎くことは一度もされなかった。それがごく自然な先生の在り方でした。救いの確信と希望に満ちた誇りを持ち続けられました。）

＜召された者、聖なる者とは＞

ですから、3章の1節で「召された者」とか 「聖なる者」と言っているのは、何か完璧な者として、おだてているわけでも、褒めているわけでもないのです。そうでなく、召されなければどうしようもない者、神が召してくださることによってのみ意味付けられる者という意味なのです。

つまり、この「聖なる者」、ハギオスという言葉ですが、これは「清く立派な聖人君主のような」ということとは全く違うのです。「神のものとして、神によって、この世から区別されている人」という意味なのです。
（このアンダーラインの部分は聖と義と愛を正しく理解することの上でとても重要だと思います。）

例えば、牧場で沢山牛が放し飼いになっている時に、体に付けられている焼き印を見て、「これはうちの牛、あれはうちの牛ではない」と区別していきます。ここでは、神のものとして区別されたのが「聖なる者」という意味なのです。ですから本質的に、そのことについて私たちの側には、何も資格も、何の責任も、相応しい価値も、何もないのです。

唯、神が自分の者と仰ったからには、神の者となっている、それが「聖なる者」なのです。「神から愛され、神によって支えられ、神によって招かれ、神によって召され、そして神によって御自分のものとされ、御手の中に支えて頂いている」そういうあなたがたが、信仰共同体の中の存在なのです。すべては神に原因譚があり、神にすべての拠り所がある、そういう群れの中に『あなたは主と共に生きているのです』ということを、ここでは語っているわけで、そんな神の一方的な憐れみ（贔屓（ひいき）ならぬ依怙贔屓（えこひいき））によって、神との関係を和解と回復に至らせて頂いている者なのです。

そんな「あなたがた」、それが「兄弟」という者で、特に新約聖書で言う「兄弟姉妹」なのです。ですから「今、キリストを信じるがゆえに受けている迫害や苦難の中にあっても、イエスに対する信仰を揺るがすことなく持ち続けていく、そのことこそが大切です」ということを、この1節の後半で「**私たちが公に言い表している『使者』であり、『大祭司』であるイエスのことを考えなさい**」と示しているわけです。

＜イエスは主である」ことを、もう一度考えること＞
つまり、私たちが「イエスは主である」と言っているその意味、内容をもう一度深く「考えなさい」というのは、別の角度から言うと、そのことに対し「心を向けて熱心になりなさい」という意味なのです。だから、他人の信仰については色々詮索せず、「イエスのことについて、あなたはあなたなりに一所懸命考えてゆきなさい、しっかりイエスの人格を捉えてごらんなさい」と告げているのです。

それでは、その中でイエスに対しどういう捉え方をすべきかというと、次の二点が挙げられます。
一つ目は、「使者であるイエス、仕え人であるイエス」。人間の兄弟のような一人となってくださり、そして、それゆえに人類全体の責任を負う「隅の親石」ともなってくださった真の人イエス。これが「使者」という言葉で書かれている全容ですから「神の国から遣わされた者としておいでくださったイエス、そういう御方に先ず心を向けなさい」と。
二つ目は「神の啓示の究極的なメッセンジャーとして、私たちの所に遣わされた『真の神なるイエス』」。「その御方に、心のすべてを向けなさい」と。

この「使者」という言葉を、キリストの「神格」を表すものとして捉えるならば、その後の「大祭司」という言葉はキリストの「人格」、それも、人としての姿の最高峰を表すものと受け留められます。
あなたがたが、そのイエスに対して公に言い表している信仰、それをもう一度しっかり確認しなさい。そして「人々の前に、自らの信仰を高く掲げて、思いの丈、神なるイエスを告白し、闘いを進めていこうではありませんか。今、あなたはその真只中にいるのです

よ。だからグラグラしないで、その御方のことだけに心を集中させてゆきなさい。」と呼びかけているのです。

＜エジプトでの試練は、神の御心＞
あなたがたの先祖であったイスラエル人は、真っ先に神の召しを頂き、聖なる民とされながらも、エジプトの荒野の試練の中を歩いていた。試練に遭ったというのは、彼らが神の御言に従ったゆえだった。神に召されたから、神のものとされたから、彼らは荒野の四十年間の旅を続けたのだ。もしそうでなかったら、彼らはエジプトでは（ある意味）食べ物に事欠いたり心乱されることもなく、辛い奴隷の存在であったとしても、うまく生き延びることはできたでしょう。しかし、神の者とされることは、そのようなことに甘んじることではなく、たとえ苦難があろうとも、その中で神の者とされている名誉、喜び、感謝、誇りに生きることなのです。

この手紙の相手先はユダヤ人ですから、そう言われれば、正にその通りだと得心し、もう一度確認をして奮い立つことは、自然な流れだと思えるのですが、そういうことを自然な成り行きだけに任せず、この第1節の中で、著者はきちっと質しているのです。
「あなたがもっている誇りを捨てないで、生き続けなさい」と。しかも「あながたは優れているのでもなければ、力があるのでもないけれど、何より神が愛してくださっているがゆえに、今このような戦いを闘っているのだ」と。「それが神の愛の証しなのだ」とも。「だから、あなた方はその戦いを闘い抜かなければならない。この試練の真只中でも信仰を告白して、その信仰に堅く立ち続けて歩んで行くことが大切なのだ」ということも、ここで呼びかけてゆきます。

＜大祭司とは＞
「大祭司」という言葉はキリストの「人格」、それも人としての姿の最高峰を表すものとして受け留められます。
この手紙のここから少しの間ですが、『**大祭司**』という言葉が、大変重要な意味をもつものとして登場して来ます。この手紙のキーワードのひとつになっている言葉ではないかとも思います。「神に等しい御子である御方が、神の自由さをもって、自ら被造物に身を置き、人間としての悲惨を負われた」と。
このことは、フィリピの信徒への手紙２：６－８にも「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順でした。」とあります。

「イエス・キリストの父なる神に対する服従ということを非常に強く訴え、そしてそのことが、キリストがあなたがたの一切の罪を担うために必要なことだったのだ」そうしたイエスが、私たち自身が十字架上で受けるべきあらゆる悲惨を御自分の身に負うてくださった、身代わりとなって担ってくださった、そういう現実を『**大祭司**』という言葉に込めているわけです。

つまり、イスラエルの人たちが冒した罪の贖いのために、神の御前に贖罪の供え物を献げる、それが大祭司の務めだったわけですが、正に『真の大祭司』なるイエスは、御自身自らがその贖いとなられ、彼らの罪責を悉（ことごと）く背負ってくださったのです。

＜イエスの愛を生きるとは＞
イエスは、イスラエル共同体のために日々仕えていた大祭司のように、すべての被造物のために祈り、執り成し、労苦し、試練を受けられ、最終的には自ら贖罪の供物となられ、十字架の死に至るまで忠実に、大祭司としての務めを果たされた。「その御方にこそ、あなたがたは心を傾注して生きなさい」と。

真の人であり真の神であられるイエスと出会い、イエスの御心に触れて、人格的な交わりがそこに始まる。具**体的に**は、復活のイエスを通して主の弟子たちは、**イエス**が愛の十字架に至られた**生き様**を知った。**そう**した体験を基にして初めて、彼らはイエスが計られる救いの福音の道（殉教をも辞さない世界宣教）を、主の御霊と共に進みゆくことが、彼ら自身の志となったのである。

こうしてイエスの愛を生きることができる者になった弟子たちは、そのイエスの気高い温もりをを身近に思い起こす時、新たな生の力を与えられたのである。つまり、あのイエスという御方の足跡、御言、お示しに、私たちが一心に心を向ける時、私たちは新しい者とされるのです。「人もしキリストに在らば、日々新たに造られし者なり」という言葉が意味することとほぼ同じ内容が、ここに語られているのです。

この1節の短い中にこれだけの内容を込めながら、この著者はかようなユダヤ人に向かって、特にキリスト教に改宗したために難難に遭い、困難を受けているユダヤ人キリスト者に向かって、心からのメッセージを送り続けたのです。
本当に著者は「あなたがキリストを信じたのは、主からのとびきりの恵みなのだ」ということを、厳しい闘いの中に在る者に訴えかけているのです。むしろ「最高の幸いなのだ」と大声で言いたいわけです。そのことを言うためには、やはり彼らのもっている旧約聖書の知識を共通項としてしっかりと据えながら、新約のキリストに立つことが必要だったわけで、彼らが大事にしてきた「兄弟」とか「大祭司」という言葉を使いながら、そのユダヤ人に向かって呼びかけをしたのだと考えます。

（1節をこれ程に詳しく語られた解説書が他にあるだろうかと私は思います。ユダヤ教に回帰しようとしている、迷えるヘブライ人（ユダヤ主義キリスト者）に、愛情をもって親切に、しかも毅然と「天の召しにあずかっている聖なる兄弟」と呼びかける著者の声は、今、ここで、松山幸生先生のお声を通して私自身にも語りかけられています。「天にまします我らの父よ」と「呼びかける」こと自体が恵みだと教わりました。新約聖書から旧約聖書を読まないと分からないことが多いです。聖書はその研究に生涯をかけるような重い神の栄光が詰まった本だと教えられます。）
（「心を向ける」は松山幸生先生がよく使われた言葉の一つです。それに続けて主の慈しみと恵みを味わいみよ」と仰ることが多々ありました。ここでは「とびきりの恵み」と言われ先生の思いの深さがより強調されているように感じます。「イエスの愛を生きるこ」切々と訴えてくださっています。）

第2節から4節、
モーセが神の家全体の中で忠実であったように、イエスは御自身を立てた方に忠実であられました。家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。どんな家でもだれかが造るわけです。万物を造られたのは神なのです。

ここでのテーマは「**イエスはモーセにまさる**」ということです。それは「イエスの人格を思い起こすことの意味」を、旧約時代の指導者モーセとの対比を通して語りかけることです。そこで「モーセはどのような人格として、イスラエルの人々に理解されていたのだろうか」ということが、一つ重要な問題になって来ます。

＜引き出された者、モーセと神の出会い＞
かのモーセの生き方を決定的にしたのは、モーセ自身予想もしなかった「正面切っての神とのお出会い」であったのです。少なくとも、この著者はそのように考えています。
モーセは、同胞のイスラエル人を打ちすえたエジプト人を殺害して、追われる身となり、すべてのエジプト人から身を隠してミディアンの野に至った時に、正面切って直接、モーセと出会ってくださったのです。

モーセは「**わたしはあなたの神である。あなたの立っているところは聖なるところである。履物を脱ぎなさい**」とお命じになる神と、直接的にお会いしたのです。無論、そこでの神とのお出会いは、神の御姿を拝見したとか、こんな存在であられたと、絵で描けるようなお出会いではありません。「遥か**に彼を超えた御方**が、その被造物なる自分と、御声を通して邂逅を果たされる」というようなお出会いであられたのです。

更に、神はそこで燃える柴の中から、神はモーセに御自身を啓示されました。モーセはその名前の通り、唯「神から引き出された者」として、正に「神なしには存在できない者」として、そこに立っておりました。そして、神からのそうした召し出しによって、旧約聖書の人物の中でも最も卓越した一人として、神に用いられることとなりました。

聖書では、そうした輝かしいモーセ像が描き出されていますが、そのモーセ自身は、自分の人間としての限界をよく知っていたのです。彼は神から召された時に「私は口が重く、舌の重い者です」と辞退申し上げたのです。ところが神は、そんなことは全くお構いなしに、そのままモーセをエジプトに連れて行かれて、王ファラオに会わせられました。かように神が用いてくださったからこそ、彼はファラオに接見することができたのです。

このことは、今、迫害の中にいるユダヤ人に対するものでもあり、「あなたがイエスをキリストと信じて生きていることは、あなたがこの世に勝っている証拠ではないのです。
あなたはこの世に負けている存在かもしれない。それでも（いや、それだからこそ）主はこの苦難の世に在るあなたに立ち上がるよう命じられ、あなたは今、主にしかと立たされているのですよ。」と、モーセの話をしながら、この著者はそう告げて励ますのです。

ただ神は、この弱く、破れたモーセ（事実上の殺人者）をファラオのところにお遣わしになる際に、一つだけその根拠となることをお語りになりました。それは「わたしは必ずあなたと共にいる」ということです。これを裏返せば、「あなたにはそう思えないことであろうとも、既に、わたしはあなたとずっと一緒にいたのだ」ということなのです。

（「**わたしはあるという者だ**」を聖書協会共同訳では「**わたしはいるという者だ**」と改変。）

それは、日頃私たちが口にしていることとは大分違うのです。「今日はついていたから、うまくいったよ」ということをよく耳にしますが、神は「たとえあなたが「不運」でうまくいかなくても、このわたしが一緒にいるのだ」と仰る。それが実は、神がモーセをお召しになった時のお励ましの御言なのです。　そういう神のお招き、呼びかけに、何よりも私たちは心を向け、思いを寄せていくことが大切なことなのです。

モーセは苦闘しながらも徹底的に神の導きにすべてを委ね、すべてを賭けて、自分の生きて行く人生を選び採っていきました。そして、欠けの多いイスラエル共同体の一員として、自ら徹底的に神に忠実に生きようと試みしました。モーセは、あくまでもイスラエル共同体の中で、一生懸命、神に生きようとしたのです。

（旧約聖書の中には読み進むのに難儀をするところが多いですが、時に「わたしがあなたと共にいる」というフレーズが光のように出てきます。そんなときほっとする経験があります。）

この偉大な信仰者としてのモーセ、彼は預言者でもあったわけですが、それ以上でもそれ以下の存在でもなかった。そういうように、モーセを捉えることもできるのです。モーセが死んだ時に、イスラエルの人々はモアブの平野で三十日間モーセを悼んで泣き、モーセのために喪に服し、その期間が終わった、と出エジプト記は記しています。が、正にそうなのです、死んで終わってしまうのです、それが「人間」の定めですから。
そういう一個の被造物にしか過ぎないものを神格化したり、或いは神のように捉えたり、絶対化するような罪は決して冒してはならない。ましてや、死者礼拝はもっての外です。

「モーセなんていう人間は、いたっていなくたって構わない」というようなことを私は時々、敢て口にするのですが、そういう実在があったかどうかは問題でなく、そのように「神は人を生かすのだ」ということを学ぶ方が大事だと、私たちの中で本当に認識される必要があると思うからです。「モーセは立派だった、あんな立派な人格をもったモーセは不世出・・」などと評したりしますと、まかり間違えれば、モーセが神様になったり、モーセ信者ができたりして、大変なことになるわけです。

そういうことにならぬよう、ここで、もう一度確認しておかなければならないと思います。被造物の神格化とか、絶対化、偶像化、それは結局、人間の絶対化に結びついてゆくし、そのことが差別を生み出したり、序列化を生み出したり、結局「選民意識」というものがそういうところに結び付いて生まれ出てしまった。ともかく、そういうことを避けていかなければならないのです。

（偶像を造り出すことは人間を絶対化すること。近代文明は偶像を造り出し過ぎたと私は思う）

モーセがシナイ山で律法を受けるために神の御許に上がっている間、イスラエルの人たちは待ちくたびれてしまい、不安の中でとうとう金の子牛を造って、それを神と崇めたりしていった。とかく身近な、目に見える助け手（安心材料）が欲しいと考えるようになる。そういうように、信仰をもって待つ、忍耐することができないため、見えない神を信頼してゆくことがなかなかできない私たちの在りようというものが、この苦難の中にあるユダヤ人を例に挙げて、あなたがたはそうであってはならない、と訴えているわけです。

（金の子牛は過去の物語ではない。21世紀の私たちも金の子牛に囲まれている状況下に生きている。）

神は、そうした信仰に破れた人間世界の真っ只中に、イエスを天上から送ってくださった。人間とは比べものにならぬ、人知を超えた存在として送ってくださった。神に万物の相続者として立てられたイエスは、信仰における忠実さをもって、神の御子かつ人の子として生き続けられた。私たちは、そういう御方の全存在を受け入れ、その全生涯を神の御前に全きものとして献げられ生き続けられたイエスの御姿に心を向け、「見なさい、『真の大祭司なるイエス』はそういう御方なのだ」ということを告げ知らすべきなのです。

3節前半

家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように

この言葉は、当時の一般社会でも言われていたことで、「家を建てた御方が住まわれることによって、その家は貴く、生きて働くようになる」という意味です。
それはつまり「家であるイスラエル共同体は、神によって建てられたのだから、そこに神がお住みにならない限り、それは何の意味も持たない存在なのだ」ということを言わんとしているのです。
神は、万物の相続者として定められた御子をイスラエルに与えてくださった、その家の中に共に住まわってくださったのである。そのことが正に、彼らが神の民であり、兄弟である拠り所となるのである。更に言うならば、この神の家は、単にイスラエルだけではなく、全世界が御手によって創られ、神によって立てられたのだから、そのすべてにおいて、神を受け入れるべきなのだ。
そして、その信ずる群れを通して、世界がやがて一つの家とせられていくことを、私たちは信じて生きていこうではないか。あなたがたを迫害する者もまた、神がお宿りくださる時には、兄弟になり得る者なのです。だから彼らは、あなたがたが排除する対象ではなく、贖いのために祈っていく対象、執り成しの対象としてイエスが「あなたを責める者のために祈りなさい」と仰った者なのです。

（松山幸生先生の政治への働きかけは敵対するのでなく、祈りによって共に目覚め、真実への道を歩もうと呼びかけ、国会の前で、デモ隊の騒乱の中でも静かに祈られた。先生は武力で抵抗したのではないのです。その姿勢は忘れられてはならないと思います。先生を社会派として揶揄する人がいますが、先生は永田町で超党派のクリスチャンの集いを主催され、国会議員にも伝道されていたのです。）

私たちはこのイエスの人格を身近に思い起こすことによって、そこに神の一回的な啓示

を徹底して見ることができます。また歴史上の他の偉大な存在も、輝かしい業績を上げた被造者も、決して神格化すべき者は何もなく、神御自身だけが本当に私たちに対してすべてを与えうる御方なのです。

第5節～6節、
さて、モーセは将来語られるはずのことを証しするために、
仕える者として神の家全体の中で忠実でしたが、
キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。
もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば、
わたしたちこそ神の家なのです。

＜栄光に満ちたイエス・キリスト＞
忠実に神の御前に生き続けた「一つの人格」、旧約時代では、モーセという人がその代表格として据えられましたが、新約時代の新しい歴史形成の中では「受肉された降臨の御子イエス」という御方を、救い主なる存在として私たちに与えられ、その御方は父なる神に忠実に生き通された存在であられました。

モーセは、人間的限界にて死を迎え、消えましたが、イエスは十字架の上で死なれても尚、甦られて天に帰られ、今尚、聖霊として私たちを導かれ、支え続けてくださいます。「モーセは神の家に仕える者」でしたが、「イエスは神の家を治める御子」としておいでくださっている。あくまでモーセはこの地と神に仕える存在でしかなかったけれども、イエスはこの地を治められる、神なる御方なのだということがここでは明言されています。

それらは、頭では分かりますけれど、現実生活では、イエスを「絵に描いた餅」のように、真実の救い主とは実感していない生き方をしてしまいがちな私たち。丁度イスラエルの人たちが頭ではモーセが力ある指導者だと分かっていても、彼の姿が見えなくなってしまえば、金の子牛を造って身近で拝まないと安心できなかったと同じように、私たちは目に見えない御子イエスより、何か頼れる価値のありそうなものを身近に置いて拝まないと、安心できなくなって来る。そういう信仰の破れと、不安からの誘惑が襲ってくる可能性を有することを、常に覚えておかねばなりません。

しかし私は、「あのイエスに、十字架上で、私のすべての罪責を贖って頂けた。それは、イエスが、この私をどれほど愛してくださっているかという証しなのだ。」ということを覚え、ひれ伏して感謝を献げる時、この御方がこの私に示してくださったとてつもない御愛、その十字架刑の貴い御業、そして、その御方に選ばれて、お従いしている自分、お仕えしている自分、そこに、人生の喜びと至福が、心の底から湧き上がって来るのです。

＜救いの第一歩＞
ですから、「どのように従うのですか」とか「どうすればよいのですか」と言っている間は、まだ真剣みが欠落しているのです。例えば聖書で「**永遠の生命を受けるには何をした**

らよいでしょう」とイエスのところに質問に来た青年がいました。熱心なユダヤ教徒だったのですが、その答えを見出せなかったのです。
　つまり彼は「この私があなたイエスに贖われ、救われなければ、そうしてこの私が赦されなければ、私の「今」はない。」ということを知らなかった、知ろうとしなかったのです。それを知ったならば、その御方をどのように愛したらよいのか、何をさせて頂くのが一番良いのか、ということを祈り求めたはずです。それが救いの第一歩なのです。

その御方を愛し従おうとする時、私たちは祈りの中で、どうしたら良いかを聖霊によって示され、相応しい行動が与えられるのです。そのようにして、その御方の御前に生かされることが大切なのだということが、心の内に示され、それが重ねられていくのです。
（「行動が与えられる」とは「生かされている」ということ。被造物として徹底した受動態から湧き出る喜びを松山先生の生き方から学びます。）

＜神の前に従順に生きるとは＞
「**もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば**」ということは、この御方こそ私を救い、この御方のみが私を愛し支えていてくださるのだという確信、また、それゆえに神の国へと招いてくださる喜びを既に経験しているならば（あなたがたがその希望に満ちて歩み続けるならば）、そんな私たちこそ「神の家」となり得るのです。

神の御前に従順に生きたという言葉が、イエスに対して用いられ、モーセに対しても用いられていますけれど、本当に大切なのは、このイエスの中にある贖いの御業、このイエスの中にある深い御慈愛です。それらの輝きによって、初めて、すべての隔ての中垣がこぼたれて一つにされ、憎しみを越えて赦し合い、愛し合うことができるのです。或いは、自分たちの大きな相違を超えて、互いに仕え合うことができる者に変えられ「真実の兄弟になり得る」のです。
そのために、イエスは愛を注ぎ続けてくださり、神へ近づく祈りの道を開いてくださり、神の御言に従って生きる歩みの道標となってくださったのです。

「モーセは、イスラエルをエジプトからカナンへ導く道標になったけれども、イエス・キリストはこの世から神の御国へ、私たちが帰るための道標となってくださった」。そういう意味において「モーセが平面的に、A地点からB地点へ、エジプトからカナンへ、という導きをしたとするならば、イエスは空間的、立体的に『この世から神の国へ』という私たちの道標となって導いてくださっている。そういう意味でも『イエスはモーセを超えている』」という、決定的な違いがあるのです。

ですから、この短い文節は、実はキリスト教の教義そのものが全部出て来る部分で、幾ら私たちが一生懸命勉強しても十分ではあり得ないだろうと思います。ですが、この箇所を一旦しっかり捉えられれば、これから先のところを学んでいく時、それが何なのか捉えるのが比較的容易になって来るだろうと思います。
今日この箇所では、色々重要な言葉とその場面にこだわり、立ち止まり考える、というような学びになりましたが、皆様のご意見はいかがでしょうか。　（1996年6月8日）

説教　　**「主の兄弟たちへの隣人愛」**

ローマの信徒への手紙 14：１－12（新共同訳）　　森 容子

今回は、ユダヤ教からの改宗者を前にして、信仰を導く際に心得ること、また、信仰生活における助言を為す際に弁えることなどを学びます。パウロは偉大な伝道者であられると共に、その心遣いも半端ないお方であられたことに、感嘆されることでしょう。

１－３節　信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。

皆さん、「**信仰の弱い人**」とは、どういう人をイメージされるでしょうか？「弱い人」という言葉から、「初心者」とか「未成熟な人」という求道者を連想なさいませんか。
しかし、ここでの「**信仰の弱い人**」とは、主キリストへの新たな信仰以上に、その人にとって長い間心の支えや教えの中心となっていたユダヤ教の影響を今尚抱えている人、律法の細則に従う習慣からなかなか抜け切れない人、と言えましょう。
そういう人のことを『**ユダヤ主義キリスト者**』と言うのだそうですが、そういう人は単に「弱い」というよりも、「頑なな」という表現が相応しいのかもしれませんが、彼らを単に批判の対象にしてしまっては、真のキリスト信仰に導くことは適いません。

ですからパウロは、そういう人を隣人として「**受け入れなさい**」と促すと同時に、「**その考えを批判してはなりません。**」とも忠告します。これを原典参照しますと、「**数々の意見を言い争いに至らせてはなりません。**」となっています。つまり、自分の弱さに対して幾つもの言い訳を重ね、自分の立場を何とか正当化しようとするユダヤ主義キリスト者に対して、指導者の方もそれに反論を重ねて逃げ道を塞ぎ、頭ごなしに批判しては、相手がもっと頑なになってしまうと警告しているのです。ですから、言い争いをせず「言い訳をもよく聞いて、彼らを受け入れておあげなさい」と告げるパウロは、人間の心理を本当によく理解されているお方であると思います。

食べ物に関しても同様のことを言われます。キリスト教信仰に立てば、神様が食用としてお創りになった動植物には、呪われるような物は何一つないと断言できます。が、信仰の弱い人、今だに律法の食物規定細則の影響下にある人は、肉や魚、鳥を食することは、禁止規定に触れ、呪われる可能性があると怖れるのです。呪われずに安心して食べられるのは野菜だけ、と信じ込んでいるのです。これもベジタリアンという人々です。
しかし、そこのところでも、食べる食べないで言い争いにならないようにと、パウロは忠告を与えています。神様に招かれている兄弟が、ともかく信仰に躓くようなことにならないようにと、教えの優先順位を弁えた指導を勧めているのです。

４節　他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。

パウロが記した1－3節を読んでも、指導者たちにはまだ強気の姿勢を取る人たちがいるだろうことを見越して、パウロはこの叱責のごとき４節を記したのでありましょう。
主の御心は、その教えをまだ十分に受け入れられぬユダヤ人を裁くことでは決してないと。

その弱く頑なな相手が、主の教えと主の御心とを一つひとつ順に理解し納得し、受け入れたことを確認した上で、指導者は次のステップへと導いてゆく。一足飛びに、その人の数々の罪を指摘して、主の十字架の贖いと復活の福音、主の愛と義の真理を連射しても、相手は消化不良となり、返ってキリスト教信仰に大いなる迷いを生じてしまいます。

しかもパウロは、このユダヤ主義キリスト者を「**他人の召し使い**」と称しているのです。その心は「その人はあなたがたが召した、あなたがたの召し使いでなく、主御自身が召された、主の召し使いなのですよ」と断っていることです。そして、その人たちに対して「彼らは信仰的になってない！」などと裁く指導者に対し、パウロは、「**いったいあなたは何者ですか！**」 という叱責の一撃を与えているのです。

更にパウロの論の凄いところは、彼ら指導者たちが彼らを導いているのではなく、実際は、主御自身が導いておられることを「**召し使いが立つのも倒れるのも、その主人次第です。**」 と告げていることです。そしてその先は「野となれ、山となれ」ということでは決してなく、「**しかし、召し使いは立ちます。 主は、その人を立たせることがおできになるからです。**」 と、確信を持って明言していることです。

この１４：４の御言葉には、私にとって忘れ難い思い出があります。

３７歳で受洗して３年くらい経った頃でしょうか、所属教会の伝道師に、折り入ってと、旧約聖書箇所の質問をしますと、先生は「私には旧約は分かりません。私の書庫に注解書がありますから、どうぞ、それを持って行って自分で読んでください。」と言われたので、選んで一冊お借りし、読んで理解しましたので、その関根正雄著作集の全１５巻を毎月一冊ずつ購入することにしました。

疑問はそれで解けたのですが、先生が「私には旧約は分かりません。」と平然と答えられたことに、私は釈然としないものを感じました。「あの先生は、本当に牧師になれる方なのだろうか・・」などと、つらつら思い廻らしながら、ある日聖書を捲っておりますと、先程の１４：4の「**他人の召し使いを裁くとは、あなたはいったい何者ですか！**」の聖句が、まさに天からのみ告げのように、いきなり私の目に飛び込んで来て、心に突き刺さったのです。本当に驚きました。主からのお叱りが下ったと思いました。そしてひれ伏して、悔い改めの祈りを捧げました。

その後、その先生は、所属教派の先生方から「これからは旧約をもっと学ぶこと」との条件付きで按手礼をお受けになり、牧師になられました。しかしその後も、旧約の説教や聖研は一度もありませんでした。ですが先生は、パウロの言葉の通り、大きな新会堂を建

てるというお働きを力強く先導されました。はるばるアメリカ各地の教会を訪れて、建築献金をお願いして回るということをなさったり、ゴスペルや心理カウンセリングの指導者などを次々教会に招かれて、大勢の人々を教会に迎え入れられました。

その後、私は献身のためにその教会を去り、教団の教会へ移籍をしましたが、このロマ書14：４を主から下されたあの日の衝撃は、生涯、忘れることはありません。

５－６節　ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。

キリスト教暦には、特別に尊ばれる三大祝祭日（クリスマス・イースター・ペンテコステ）がありますが、週毎の日曜礼拝を重んじておられる方もいますし、また、主が伴われるすべてのいのちの日を、最高の一日一日とする方もおられます。どちらの考えも決して間違えではなく、各々それに確信を持つべきだと、パウロは告げています。

同じように、食事を戴くときは、まず神様に感謝を捧げ、主にお仕えするための霊肉の糧として戴きます。また、特別なお祈りのために断食を行うとか、主に与えられた十戒から派生した食物規定の遵守により一定の食物を食べないということも、それはそれで、主にお仕えするためという、その人なりの信仰に基づくことであるのですから、神様に感謝をすることになると、パウロは告げているのです。

７－８節　私たちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。私たちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

私たちに、これほどの信仰の高み、気高い信仰の境地を指し示してくださるパウロ先生に感謝し、この御言葉を、常に心に携帯していたいと存じます。

かくいう私は、牧師館で母と同居し夫を介護していた頃は、自分が生きている意味は、何より、彼らの健やかなる日常を保つために、主に用いられているのだと信じて励んでいました。その二人を失って天に送ったのち、自分が生きている意味は、改めて、この教会の牧師として説教や聖書研究等を行うことにより、信徒の方々に主の愛と義の福音の素晴らしさを説き、主への感謝と感動を分かち合うことにあると、信じました。

では、自分もいつか介護ベッドの上で、日常の営みさえ手伝って頂かなくてはならない身となったら、いったい私は何のために生きていることになるのでしょう？　でも、そんな日が来ても、私は主のために生きているのだと信じることができるのです。人生で出会った大勢の方々、その方々のお名前を忘れてしまっていても、お一人ひとりとの思い出をゆっくりと脳裏に描きながら、お交わりに感謝を覚え、主と共に彼らの救いのために、今まで以上に熱意を込めて執り成しの祈りの手を結ぶことができます。時間がありますから。そうして、いつの日か死にゆく日が近づいてきたならば、自分は主に召されるためにこそ死んでゆくのだと、主のものである自分を堅く信ずることができるのです。

今からそんな心備えができておれば、死も何も怖れることはないでしょう。じたばたする必要もありません。いやいや、私のことですから、最後の最期までじたばたするかもしれませんが、それも笑いながら、最期まで共に語り合ってくださる主が常に傍らにおられることで、何よりの慰めが与えられることを、信じています。

皆様、７節冒頭の「**私たちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく**」との言葉に、疑問を持たれる方はあられませんか？「私たちは自分のために生きているのではないのですか？　そう考えてはいけませんか？」と。でも私たちは、私たちが受けるべき裁きからの救いのために、十字架上で身代わりに死んでくださったイエス様を礼拝し、ほめ讃え、伝道するために生きているのです。これは真理です。更に私たちが死ぬのは、御国にて新しい自分に復活させて頂き、永遠の命の中で主に全きにお仕えするために、この世を去り、この世での業を卒業するのです。これも真理です。

考えてみますと、私たちの生活は、すべて、何から何まで主からお借りしているものによって成り立っています。身も体さえもお借りしており、本来自分自身のものではありません。貴い主のものでありますから、そのことを常に弁え、自分自身を疎かにせず、主に在る尊厳を引き下げるようなことをせず言わず、自分を大切に扱わなければなりません。

私たち夫々を個性豊かに創造してくださり、一人ひとりに意義深い人生ストーリーを最善にプログラミングしてくださり、その各々の方の日々に寄り添い続けてくださる聖霊の御臨在を忘れることなく、これからの日々も感謝して、主がもたらされる喜びの中を、死に至るその日まで、兄弟姉妹と共に歩んでまいりたいと存じます。

９－１０節　キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。私たちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。

私たちはここまでパウロに言葉に従って、今回のテーマ「**隣人愛**」から導かれる「**信仰の弱い人を受け入れなさい**」という教えを深めてまりました。その上で、もう一度パウロは、問いかけるのです、「**なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。**」と。

それにNOと応えるには、主が「**死んだ人にも生きている人にも主となられるため**」に、十字架刑を忍ばれ、御父に呪われた者として死なれて陰府に下られ、死者たちにも福音宣教をなされて、救いの御手を伸ばされたことを、きちんと覚えていなければなりません。

陰府に下られた主は、その後、御父によって呪いを解かれて関係を回復され、陰府から甦らされました。今や主は、すべての主に在る兄弟の救いを確信しておられます。もはや私たち主の民は、主に裁かれることも、侮られるれることもありません。

ですから、私たち自身もそのようであらねばなりません。主に在る兄弟を裁き、侮るということは、イエス様の貴い贖いを無視する高慢となり、イエス様の御心を侮辱するという大罪を冒すことになるのです。

そして、「**私たちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。**」**というのも**真理の言葉です。ですが、審判者イエス様の御前で、全ての罪を告発され、厳しく裁かれるのではありません。私たちは、自身のとてつもない罪責を、主の十字架の贖いを信じ告白することによって赦して頂けるのです。そうして主に在る兄弟たちは皆残らず、裁きの座の主による承認を得て、罪責から放免された者として、聖らの輝く御国へと帰還させて頂けるのです。

１１－１２節　こう書いてあります。「主は言われる。『わたしは生きている。すべてのひざはわたしの前にかがみ、すべての舌が神をほめたたえる』と。」それで、私たちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。

これも素晴らしい聖句です。「**主は言われる。『わたしは生きている。』**」という言葉は、

イザヤ書49：18からの直接引用であり、そして「**すべてのひざはわたしの前にかがみ、すべての舌が主をほめたたえる。**」という言葉は、イザヤ書4５：23の「**すべての膝はわたしの前にかがみ　すべての舌は誓い**」からの引用でありますが、特にギリシャ語70人訳では、この「**誓い**」を「**賛美する**」と意訳していますので、パウロはそれを選んで用いたのだろうと言われております。

最後にパウロは「**それで、私たちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるです。**」と言われています。それは、其々の兄弟が、其々信仰の確信を抱き、互いに平和的に行動してきたということを、審判者の主の御前に証言させて頂くことです。
たとえ、その意見が分かれていようが、行動形態が互いに違って多様であろうとも、教会の民は無理なく、御心に添って進んでゆけたのだと、パウロは励ましをもって、そう告げよと言ってくださるのです。

ですからパウロは、外側から力を加えて無理やり形を一つにしようとしたり、多数派の議決に少数派を従わせよ、と強制しようとはされません。そのようなことをすれば、主の教会の民は、非常に世俗的な原理で動く団体になり果ててしまいますから。ここに「**生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬ。**」それは「**生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものであるから。**」ということを忘れじと願います。

そしていつの日か必ずや、地上の全ての舌が、主をほめ讃える日が訪れることを信じて、心から隣人愛を抱きつつ、兄弟姉妹と共に、主にお仕えしてまいりましょう。
しばし、主への感謝をもって、黙祷をお捧げ致しましょう。

写者あとがき（再掲・2022年1月3日）

今回も御言葉と松山幸生先生のお声が私に迫ってきます。
「あなたが神の家となるには、確信と希望に満ちた誇りを持つことである。しかもそれは、持ち続ける必要があり、持ち続けるべきことでもある。」と。
そして「確信に満ちた誇り」とは、「キリストの死と復活と再臨」を核心とした生活、その具体的な行動は信仰によって与えられる。その行動の広がりと深まりは、信仰によって与え続けられる。そこに希望があると言われる。（世の中の秩序がどんなに乱れ、混乱や騒乱に囲まれても尚、主に在る希望がある。）

イエスを仰ぎ見て生活してきただろうか。しているだろうか。何を確信してきたであろうか。キリスト者として誇りをもって生きて来ただろうか。それら全ての答えをNOと言っても「生かされてきた事実は実感できる。」そして、時々に思い出したように感謝している自分を観る。この「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を熟読吟味し、松山幸生先生のお導きを頂き、一歩づつ前進している自分を感じて、心ほころぶ日々があります。
この私の遠大な試みを静かに見守ってくださる方々に感謝いたします。
本稿も森容子先生の豊かな、言葉に現せない丁寧な監修に導かれております。
説教者としての森容子先生は、拙稿を声を出されて読まれていると感じます。私の誤字脱字は当然ですが、句読点、一字一角の正確さで校正してくださっています。
私の信仰的未熟さのため、句読点一つで神学的な解釈の変化が生じます。それらを見逃さず指摘してくださることに、新たな気づきを頂き、信仰から信仰へ希望を頂いて進んでおります。今号は諸事諸般が重なり、時間がかかりましたが、第5回とこの第6回の間に「或る大きな変化が具体的にありまして、」更に確信を深め、いつかそれを語ることができますれば、大きな成長が望めると思っております。
「主の祈り」の最初に「父よ」と呼びかけることのできることは、なんと幸いなことか。
そのことを教えてくださった松山幸生先生を想い、悩める人々と共に歩める力を与えられていることを謙虚に受けて感謝します。いつも「共に在してくださる神」「共に歩んでくださる友なるイエス」「共に祈ってくださる私の友」の有る無しの大いなる違いを感じつつ、この有る無しの壁を一つ一つ突き崩してゆく伝道の力を、更に強めたいと思います。

（2022/01/03）

写者あとがき２　　2025年1月22日

丁度、3年が過ぎました。再び学ぶことの重要さをしみじみ思います。
今、一つだけ聖句を選ぶとすれば（ローマ信徒への手紙5章2節）になります。
「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」
そして、「私は、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕えようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕えられているからです。私自身は既に捕えたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」
（フィリピの信徒への手紙３章12から14節）
松山幸生先生は「主からのとびきりの恵みに」「心を向けなさい」と繰り返し強調されています。「大祭司であるイエスのことを考えなさい。」と著者も呼びかけています。
その呼びかけに応えられた松山幸生先生の説き明かしに頭を垂れます。
学びは遅いですが恵みは豊かです。3年の間はコロナ禍にありましたが、住居を教会の近くに引っ越し、健康に恵まれこれ以上望むことはあり得ない感謝の日々です。
遅々とした歩みに忍耐を持ってご指導してくださる森容子先生に感謝します。